

〔編集後記〕

千葉医学会誌の編集に努力された谷口 克教授が、本年、野口英世賞を受賞された。大変遅れた報告になってしまったが、本誌の編集に貢献された、奥田邦雄名誉教授も1989年に米国肝臓学会最高功労賞の国際的な榮譽を得ておられる。御二方に編集委員会からも、心からの御祝いを申し上げます。

学会があまりにも多い。実験してまとめて、スライドにして、演壇ないし、ポスターで話して終り。原著にして書かないようだ。書く価値のない論文と考える者もあるだろうし、もう少し追加実験を加えて、impact factorの高いジャーナルを狙っているのかもしれない。そうこうするうちに、数ヶ月もすると次の学会。まあ、それは逃れたとしても、1年後には発表。医学の研究の発展は速いから、その頃は、昨年、苦労して行った実験はどこでかまとめられ、また新しい手法で進められていく。加えて、アイデアが抜群でも、まずは起承転結がきちんとした論文であることは最低限要求されるし、近頃のreviewは実に親切で、内々では気付かない、改めるべきことを適切にアドバイスしてくれる。せっかく仕上げで投稿した論文も、査読者の改訂要求にこたえるのが煩わしいと考えて、放り投げてしまう。私の専門が眼科だけとは思えない。

一方、日本語で書くのもくだらないと思う傾向は、年々さらに強くなっているのであろうし。原稿を書くということは、より難事となつてはいる。とは言え、やはり

考えがまとまったら書いて欲しい。

その昔、網膜電図は Holmgren によって発見された。しかし、母国語のスウェーデン語で書かれたため、数年後、英語で発表した Mckendrik が priority を得た。Holmgren がこれにクレームをつけ、しばらくの間、priority 論争が学会を賑わした。しかし、結局は、Holmgren が認められるに至る。果たして、日本語の論文がそのようにいくかは判らないが、「書く」という事の大切さを示す好例であろう。

1801年、Thomas Young は、たった300語で、我々の色の弁別能力に関わる因子として、「網膜には色に関する3種の異なった受容器があれば充分である」と書いた。これは、Isac Newton が「ヒトが色を見分けるために、200種位の色に関するニューロンがある」と発表したのに抗議したかたちのものである。Young のこの数行から現在の色の3色説が生まれ、色覚は説明されるに至った。

大局的に見れば、誰が発表しようと、医学(学問)が進歩すれば良いのであろうけど、成果と努力への報酬は無駄にたくない。

発表したら、考えがまとまるに至ったら、とにかく責任もってまとめ、書きましょう！発表するだけなら、旅の恥はかきすて、みたいなものですよね。

(編集委員 安達恵美子)